

取手市埋蔵文化財センター第10回企画展

# ヤマトタケルの時代

2003.7.15~9.12

午前10時~午後4時30分(入館は4時まで)

入館無料 / 休館日 月曜日(但し7月21日は開館して、翌22日が休館)



取手市大山遺跡出土重圏文鏡

## 日本国家の源流を探る

取手市埋蔵文化財センター

# ヤマトタケルの時代

弥生時代は農耕技術の習得によって安定した食料獲得手段が確保され、生産が食料需要を充足した結果、経済的な社会基盤が強化され、初期農耕社会が形成されました。

この過程で、九州および畿内では朝鮮半島および大陸との接触によって農耕技術ばかりでなく政治的な体制を受容することになり、古代国家への段階的な発展がはじまりました。東国では、ほぼおなじ時期に農耕社会を形成しましたが、大陸文化とは非接触的な独立した発展であって、政治的にはまったく発達しませんでした。

初期農耕社会として、弥生時代的共同体は経済による結びつきから形成されたのに対し、国家成立以後の社会は、生産物を再分配する過程での余剰部分の搾取にとどまらず、収奪的に生産物を独占的集約する体制を基盤として、武力による中央集権的な支配を完成することで成立したのです。

こうした国家的な政治的支配を発達させた畿内の政治勢力が東国に進出すると、もとより強固な政治的基盤をもたない東国の初期農耕社会は容易にそれを受け入れたのでした。

しかし、政治的な進出の背景には、新しい支配の受け入れを容易にしたもうひとつの大きな要因として祭祀的な動機がありました。これが前方後円墳に象徴される古墳時代のはじまりです。

「古墳時代」と呼ばれる4世紀から7世紀にかけての日本の歴史はひとつの国家に全土が統一され、中央集権的な支配制度が確立されてゆく過程でしたが、古事記では景行天皇は皇太子であるヤマトタケルを犠牲にしてまでも武力によって地方を征圧しようとした。神話は、尊い肉親の犠牲を象徴として天皇支配の正統性を唱えようとしたのでした。今回の展示は、地方で出土した遺構や遺物をとおして、地方の眼から見た成立直後の日本国家がどのように中央と地方の関係を築き上げていったかを探ります。

平成15年7月

取手市埋蔵文化財センター

---

---

## 講演会のご案内

以下の日程で講演会・調査報告・講座を開催しますので是非ご参加ください。  
定員40名(当日受付順) 場所 取手市埋蔵文化財センター2階講座室

### 講演会

「取手における古代史発掘 柏原遺跡から  
向原遺跡まで」

講師 茨城県教育財団調査第2課長  
鶴見貞雄 氏

日時 8月23日(土)午後2時より

協力 茨城県教育財団

### 調査報告 「市之代6号墳の発掘調査」

埋蔵文化財センター考古担当

日時 7月26日(土) 午後2時より

### 考古学講座 「やさしい考古学 石器と土器」

埋蔵文化財センター職員考古担当

日時 8月9日(土) 午後2時より

### 考古学講座 「やさしい考古学 国家と古墳」

埋蔵文化財センター考古担当

日時 9月6日(土) 午後2時より

---

---

## 例言

1. このパンフレットは平成15年7月15日から9月12日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第10回企画展「ヤマトタケルの世界 日本国家の源流を探る」にともない発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は埋蔵文化財センター考古担当の宮内良隆が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、石岡市教育委員会、大洗町教育委員会、龍ヶ崎市教育委員会からこころよく貴重な文化財をお貸しいただきました。国立歴史民俗博物館の永嶋正春先生には副葬品について、西本豊弘、小林園子先生には人骨についてご教示をいただきました。箕輪健一氏には巴形銅器についてご教示いただきました。諸星政得先生には今回の企画展全般にご指導いただきました。記して深謝いたします。

## 1 4世紀の集落・住居

**大渡遺跡** 昭和55年11月から翌56年9月まで大渡遺跡調査会が発掘調査をおこない、その後も継続して調査がおこなわれ、現在まで竪穴住居址21軒が発掘されている。4世紀前半からはじまる大規模集落であり、その特徴は隅丸長方形型と方形型の住居址の形にあらわれている。土器でも下総地方に特徴的な棒状浮文や網目状捺糸付の壺形土器が出土している。

第I-7号住居跡は3.6×3.4mと小型の正方形に近い隅丸方形型住居跡である。祭祀用の小型土器を多く出土した。

PQ22-26土坑群は浅いうえに重複しているため形が不鮮明である。ここから祭祀用の小型土器が出土している。特徴的なこれらの祭祀用の小型土器のなかには、あきらかに在地系の長胴甕形土器の姿がみられる。



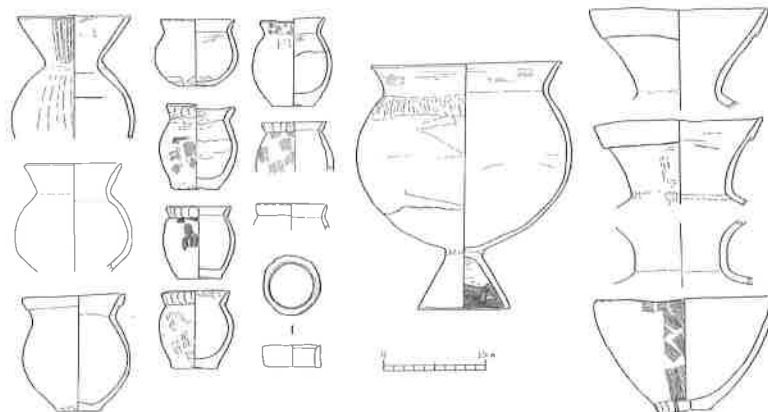
大渡遺跡第10号住居跡

第I-10号住居跡は7.2×5.2mの大型住居で幅0.5mほどのテラスが内側を1周する。東壁テラス中央に窪みがあり出入り口と思われる。南壁中央からまとまった土器が出土した。

**祭祀跡** 古墳ばかりでなく、集落や住居において祭祀がおこなわれていたことがわかっている。とくに大渡遺跡第10号住居址は一括破碎土器が発見され、大型住居内での土器祭祀であると思われる。



大渡遺跡出土壺



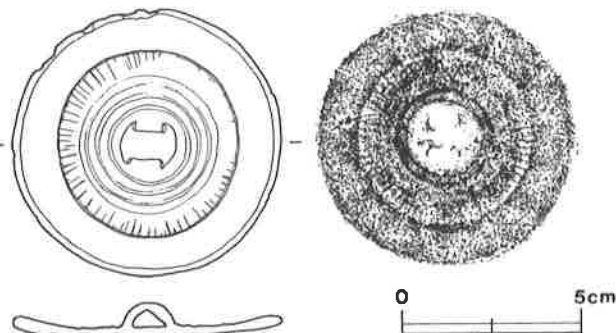
大渡遺跡第7号住居出土土器

**大山遺跡** 平成8年4月から9月、平成12年7月から9月まで茨城県教育財団が発掘調査をおこなった。竪穴住居址50軒が発掘された。4世紀後半で時期が一部大渡遺跡と重複する大規模集落である。

住居プランは方形にほぼ統一されている。第37号住居址から重圏文鏡が出土して注目された。

**鏡** 日本では弥生時代に朝鮮半島、中国鏡の到来があり甕棺墓などに副葬された。国内では小型中国鏡を模倣して鏡の製作がはじまる。輸入鏡を舶載鏡、国内産を倣製鏡とよぶ。重圏文鏡や内行花文鏡は起源が弥生時代にまでさかのぼる。

墳墓、古墳に鏡を副葬する習慣は日本では一般的となり、多くの鏡が埋葬された。それは鏡の大型化という現象にも現れていた。三角縁鏡などに代表される大型鏡は特別な意味をもっていると考えられたのである。しかし5世紀中頃になると、鏡熱は急速に衰えるのである。

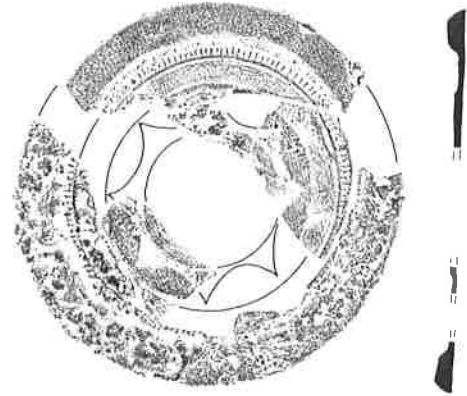


大山遺跡出土重圏文鏡  
茨城県教育財団文化財調査報告第185集「大山I遺跡2」

**重圏文鏡** 古墳時代前期の大山遺跡第37号住居址から出土した。面径7.5cm、全体に錆が著しい。4重同心円状文様で一番外側に櫛歯文帯がある。住居跡は5.5×4.4mの長方形中型の住居である。壁面は深くしっかりしている。

**内行花文鏡** 龍ヶ崎市長峰古墳群第39号墳から鉄剣やガラス玉とともに出土した。面径11.5cm、紐の部分は失われている。内区文様を復元すると8花になる。39号墳は中世城郭の物見台に利用され、原型をとどめていない。周溝も検出されなかった。規模は現況で東西14.1m、南北13.7mの方形、高さは2.9mである。

**巴形銅器** 3世紀から4世紀にかけて出現した青銅製飾り金具。原形はスイジガイに求めることができる。貝製品に原形を求めることができる装身具は多い。とくにその形を残すということはたんに装身だけでなくシンボリックな意味合いをもっていると考えられる。盾や鞆に装着された状態で古墳から出土した例がある。茨城県の例のようにいずれも住居跡から出土しているのはきわめて珍しい。佐賀県吉野ヶ里遺跡から石型が出土しており弥生時代に日本国内で生産されたことはほぼ

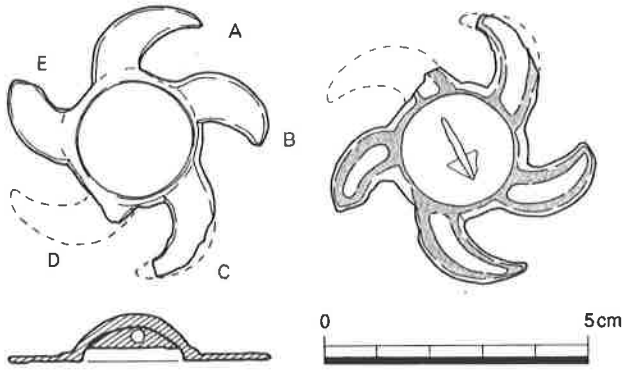


長峰第39号墳出土内行花文鏡

茨城県教育財団文化財調査報告第184集長峰城跡(長峰遺跡・長峰古墳群)

間違いない。一方、朝鮮半島でも慶尚南道金海大成洞遺跡木槨墓から出土している。

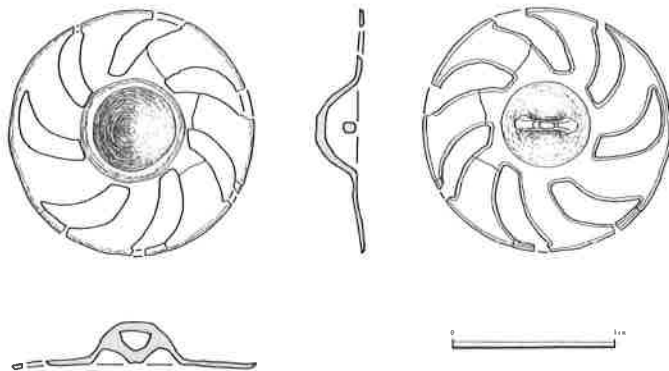
石岡市宮平遺跡出土巴形銅器は第41号住居跡から出土している。この住居跡は5.75×5.7mの正方形型住居で北壁中央にカマドをもつ古墳時代後期の時期である。弥生時代土坑、古墳時代前期住居を破壊して作られている。半円球座で右より5脚のうち1脚を欠いている。



宮平遺跡出土巴形銅器

婆良岐考古第24号「茨城県石岡市宮平遺跡出土の巴形銅器について」

大洗町一本松遺跡出土巴形銅器は第53号住居跡7×7.3mの正方形に近く胴の張る隅丸方形型の弥生時代住居跡から出土している。こちらも半円球座で右よりであるが7脚である。しかも脚がすべて外縁でつながるといふ珍しい形をしている。したがって脚のあいだは窓のようにみえる。



一本松遺跡出土巴形銅器  
井上義安編著「一本松遺跡」

今回展示した鏡と巴型銅器という、2種類の青銅器の共通点は、両方とも初現を弥生時代にさかのぼることができる古い遺物という点である。青銅器をつくる技術は当時、関東には存在しなかったもので、これらはそれぞれ長い経路をはるばるわたってきたものである。

## 2 古墳の被葬者と副葬品

古墳に葬られた人を被葬者とよび、一緒に埋められた品々を副葬品とよぶ。

古墳は単独で存在することは少なく、ひとつの地域に複数の古墳が存在するのが通例である。代々の首長の墓であるとか、大王とそれに従属した臣下の墓であると言われているが墓誌による氏名がないことでその関係は不明である。取手市内では市之代古墳群と糠塚古墳群が知られている。



**市之代古墳群** 市之代の台地上に21基の古墳が確認され、うち9基が調査されている。3号墳は新稲豊橋建設のさいに発見され、前方後円墳で周囲に埴輪がめぐらせてあった。8号墳は内部主体が軟質凝灰岩の截り石積でつくられた横穴式石室であった。そのほか9、10号墳や17、18、19、20、21号墳は古墳を区画する溝だけが検出されている。

小貝川沿いの台地には守谷市に同地古墳群、藤代町には延命寺古墳群、大日塚古墳などがあり、もともと市之代古墳群と同じ系譜のものと考えられる。

**糠塚古墳群** 稲戸井駅の北方0.5kmに位置する。小貝川支流沿いの台地にあるが、市之代古墳群と比較すると内陸よりにある。前方後円墳1基と円墳2基の合計3基からなる。いずれの古墳からも埴輪が出土している。円墳2基には盛土された墳丘がなく、墓域を区画した溝だけであった。2号墳から木棺直葬が発掘され、鉄剣が出土した。



市之代6号墳

人骨や遺物は散乱していた。

出土した人骨は、下顎骨を数えて9人以上、うち老年2人、壮年1人、青年4人、不明成人2人で女性が2名以上含まれる。副葬品は玉類、鉄芯銀装耳飾、鏝破片、太刀破片、鉄ぞく破片などである。石棺と墳丘を隔てた反対側から検出された土壌からは何も出土しなかった。

**市之代6号墳の被葬者** 古墳では誰が埋葬されたか問題となるが、実際に個人を特定することはほとんどできない。ひとつの石棺から複数の人骨が出土する場合は、追葬されたものであろう。その場合、当初埋葬人骨との間にどのような関係にあるのかが課題となる。そのためには人骨から直接わかる性別、年齢、歯の特徴を調べるのである。

**市之代6号墳の副葬品** 追葬は、人骨や遺物を攪乱するため、今回の調査では、原形をとどめるものが少ない。そのなかで太刀金具破片、鏝破片が出土しているので鉄剣が副葬されていたことがわかる。また鉄環が出土しており、鉄を心材としてもちいた銀装耳飾と思われる。

**玉類** 装飾品の玉類はすでに縄文時代から知られているが古墳時代では特別な意味をもっていた。「古事記」のなかでアマテラスとスサノオが互いに身につけた玉を口で砕いて、うけいをおこなう話がある。

市之代6号墳から出土した玉はコハク（琥珀）長さ13ミリ径7ミリ1点、コバルトガラス径3ミリ13点、緑青色ガラス径3ミリ6点、漆塗土玉径6?7ミリ9点の4種類計29点である。そのほか砕かれたガラス玉の破片が11点出土している。それらのうち緑青色ガラス玉が良質であるのに対し、コバルトガラス玉は表面に付着物が多く、粗雑である。同じ径でも幅がせまく大きさがやや小さい。砕かれたガラスはすべて緑青色のガラスである。そのつくりが精粗がみられるので、技術的な系譜を考えることができる。土玉は表面の風化によって表面があらわになっているが、よく観察すると漆膜が残っているのがわかる。

今回石棺の土をフルイでふるったところ砕かれたガラス玉の破片が出土した。さきに紹介した神話にみられるように、玉が単なる装飾のためだけにもちいられていたのではなく、おそらく精霊の宿るよりしろのひとつとして貴重な意味があったと思われる。

### 埴輪

古墳の墳丘に外からも見えるように配置された土製品が埴輪である。県内では5世紀後半から6世紀に盛行するが7世紀にはほとんどみられなくなる。

埴輪には円筒埴輪と形象埴輪がある。円筒埴輪には単純な普通円筒埴輪と朝顔形埴輪があり、それぞれ円筒埴輪は器台から、朝顔形埴輪はその器台に壺を載せた姿に由来するといわれる。形象埴輪には武人、巫女、鳥、飾り馬などを現したものと



市之代3号墳 埴輪列

、盾、太刀、家を単独で土製品にしたものがあり、後者は器材埴輪と呼ばれることもある。人物を模したものは当時の服装や風習をあるていど反映していると考えられる。

埴輪作りには専門的な集団（埴輪工人）がいて、埴輪を制作した工房や粘土採掘所、埴輪を焼いた窯跡なども見つかっている。市之代、糠塚、延命寺などの古墳群や大日塚などに埴輪が多くみられるのでおなじ制作集団によるものと思われる。



糠塚古墳群出土埴輪

### 3 古墳の主体部

古墳全体のなかで、とくに被葬者を埋葬した施設、墓としての中心部をさす。必ずしも位置が中心にあるわけではない。当初は位置も古墳のほぼ中心であったが、後半になると墳丘の裾などに配置される例が増加する。これは横穴式石室の影響を受けているのではないかとされる。

**箱式石棺(市之代6号墳)** 板状に加工した石を土中で箱型に組み合わせて棺とした。筑波山系を石材の供給源として、5世紀後半ころから6世紀末にかけて、霞ヶ浦周辺を中心とした常総地方に広く分布する。茨城県北部でも軟質凝灰岩を板状に削り箱式石棺をつくる例がある。市之代6号墳の石棺の構造は短側壁各1枚、長側壁各3枚、蓋石3枚をもちい、さらに床に4枚の板石敷であった。大きさは内法寸法で長軸1.95m、短軸1.65mをはかる。

石棺とはいえ、容易に蓋をあけ追葬ができる点は横穴式石室とおなじである。

**木棺直葬(糠塚2号墳)** 古墳墳丘の頂上に細長い土壙を設けて、木製棺を直接埋設した主体部。実際に木製棺が遺存することはほとんどないが、茨城県北部では削り抜き石棺(舟形石棺)が出土している。長大な土壙が残る場合があり棺の大きさを推測できる。粘土槨、礫槨と呼ばれるものも本来木棺を設置していた。土壙が発見されなくても遺物が発見された場合は木棺が存在したことが想定される。遺体はほとんど残らない。糠塚2号墳は墳丘がほとんどなく、地山に直接土壙を掘り込んで棺を埋置したと考えられる。

**横穴式石室(市之代8号墳)** 割り石、自然石、截り石などを積み上げて石室をつくり横に開口する入り口をもうけて埋葬施設にしたものをいう。九州、近畿地方に朝鮮半島から伝えられた主体部構造であるが県内でも6世紀後半から造りはじめられる。ただし常総台地では箱式石棺が主流で横穴式石室の波及は遅れる。取手市では市之代6号墳が箱式石棺で8号墳は軟質凝灰岩の截り石積の横穴式石室であることから、7世紀代になって石材の供給源とともに内部主体の構造も変わるのではないかと考えている。



横穴式石室

箱式石棺

木棺直葬

取手市埋蔵文化財センター第10回企画展  
 ヤマトタケルの世界 日本国家の源流を探る

平成15年7月15日から9月12日まで

編集／発行 取手市埋蔵文化財センター



石岡市宮平遺跡出土土巴型銅器  
 (茨城県指定文化財)



表

大洗町一本松遺跡出土土巴型銅器



裏



ガラス玉



漆塗り土玉



琥珀玉



鏃



琥珀玉



ガラス玉

市之代6号墳出土遺物